

阿部彩、鈴木大介著『貧困を救えない国日本』PHP新書（2018年）

本書では、貧困に苦しむ当事者を取材するルポライターと社会政策学者の二名の対談を通じ、貧困とは何か、なぜ貧困を放置してはならないのか、貧困に対処するために何が求められるのかなど、根本的な課題から解決策の検討までが行われている。

本書の章ごとに内容の一部を紹介したい。第一章「間違いだらけの『日本の貧困』」では、相対的貧困と絶対的貧困について整理が行われている。絶対的貧困と相対的貧困はレベルが違うだけで実は同じものであり、絶対的貧困のみを問題視する人が「絶対的」や「相対的」の意味を明確に認識していない問題点を指摘している。

第二章「なぜ貧困を放置してはいけないのか？」では、貧困を放置してはいけない理由が検討されている。具体的には、人道的理由や貧困が社会全体に影響する社会悪化論などが紹介されており、著者たちは説得を試みる相手に応じて理論を使い分けていることが述べられている。

第三章「誰が貧困を作っているのか？」では、貧困のリスクを高める要因が検討されている。具体的には、新築住宅を勧める住宅政策や大学全入を勧めてきた教育ビジネスなどがあげられており、こうした右肩上がりの経済成長を前提とした消費パターンを変える必要性が強調されている。

第四章「メディアと貧困」では、貧困ネタをメディアが掲載する理由が検討されている。貧困コンテンツには人を惹きつける要素があり、貧困に対する“不安感”と貧困状態ではないことを確認することで得られる“安心感”の両方をくすぐる点が分析されている。

第五章「精神疾患が生み出す貧困」では、ふたり親世帯の母親に比べて母子世帯の親の抑うつ傾向が高いことや、精神科医療が未発達なために貧困問題が解決されない側面が指摘されている。

第六章「地方の貧困と、政治を動かす力」では地方の貧困の実情が紹介されており、公営住宅の独居老人などの高齢者の貧困や、子どもの貧困の顕在化が具体例としてあげられている。

第七章「財源をどこに求めるか」では、貧困問題を考える上での具体的政策の論議不足が指摘されている。子ども食堂のような個人単位の活動に加えて、日本全体の貧困対策といった大きな視点も重要であり、現状の貧困問題を解決するために政策議論を高める必要性が述べられている。

第八章「支援者の問題」では、貧困対策に直接携わる支援者と貧困当事者との距離感が問題として取りあげられている。例えば、児童相談所などの支援者が貧困家庭や虐待家庭から逃がれたい子どもを保護しても、ただ親元に戻すだけでは、その子どもは支援者に反感感情を抱いてしまう。こうした反感感情は、将来的な公的サービスの享受を妨げ、結果として貧困リスクを高めることが指摘されている。

第九章「貧困対策を徹底的に考える」では、貧困対策には二つのメニューが必要であることが述べられている。一つ目は、貧困の被害が起こらないようにする事前の対策であり、二つ目は、既に深刻な貧困状態の人に対する集中的な支援やケアである。

本書では、貧困に関する統計的データと実例を交えつつ根本的な貧困の定義から、具体的対策の検討までが収められており、貧困問題を考える上で示唆に富む内容となっている。こうした内容の充実性と同時に、貧困を自己責任論で終わらせないために難題に挑む著者たちの熱い思いが込められていることも見逃せない。（中川 敬士）